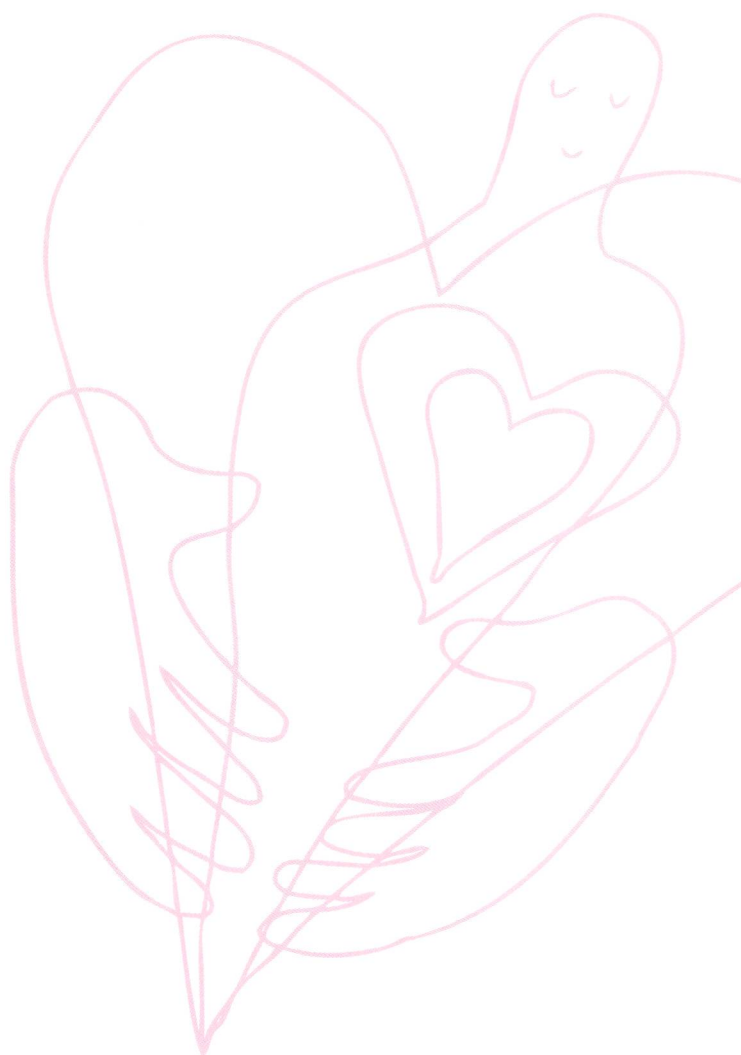


2010 Vol.

19



文部科学省私立大学
戦略的研究基盤形成
支援事業採択



新しい年があげました。
本年も人間科学研究所を宜しくお願い致します。
今年は寅年です。
「寅」には、謹む・慎むという意味があります。
心をひきしめ大事をとりつつも、
「虎」のような勇猛果敢さも忘れず
がんばっていく所存です。
今回は、2つの公開研究会の模様をお伝えします。
今後ともご指導の程宜しくお願い致します。





プロジェクト3では、昨年度より芸術療法に関するアンケート調査を行っています。芸術学の「芸術」と芸術療法の「芸術」、同じ「芸術」という枠組みで語られていますが、この二つの「芸術」に対するスタンスには何らかの差異があるのではないのでしょうか。この問題意識を出発点として、本プロジェクトは芸術学と心理学の手法を融合し、芸術療法に関する調査研究を進めております。今回は、九州大学芸術工学研究院助教であり、彫刻家としてもご活躍の知足美加子先生をお招きし、「障がい者の他者性と芸術表現」についてご講演いただきました。

知足氏は、障がい者の芸術表現をどう理解し享受するか、そして障がい者芸術における他者性とは何かという論点を軸にお話を展開し、以下の4つの観点からの考察が行われました。

1. 障がい者芸術の位置づけに関する問題点
2. 日本における障がいと芸術文化
3. 障がい者芸術運動の具体的事例
4. 障がい者の他者性と表現の可能性

まず、障がい者芸術の評価を複雑にしている背景として、以下の二つの問題点が指摘されました。第一に、作家本人に発表の意志がなく、鑑賞を想定せずに制作されている作品をどう評価するのか。第二に、鑑賞者は「障がい者の表現」というレッテルを貼らずに作品そのものを客観的に評価できるのかという問題です。

欧米発祥のアウトサイダー・アートは、元来、正規の芸術教育を受けずに制作された作品を指します。他方、日本のアウトサイダー・アートは、社会運動の一貫として「障がい者芸術」として受容されました。日本にはそもそも、福子伝説*1に見られるような障がい者を地域社会で守る構造があったにもかかわらず、業病説*2など日本特有の差別意識が存在していました。この差別構造ゆえに、障がい者の表現を芸術として高く評価することは、彼らの社会的地位を押し上げることに繋がったのです。この障がい者芸術運動の例として、障がいのある人たちのアートを「可能性の芸術」として捉える「エイブルアート・ムーブメント」、健常者とのスタンスの違いを見つめ直すことに主眼を置いた「工房しょうぶ」などの活動内容が紹介されました。

これらの背景を踏まえた上で、知足氏は、芸術的側面と社会的側面の両面から障がい者芸術を捉え直すことを提案されました。すなわち、「障がい」や「死」といった問題を自分には関係のない「他者」として捉えるのではなく、自らの問題として思考すること。これが障がいの有無を超えた芸術表現の可能性を追求することに繋がるのではないかということなのです。

質疑応答では、次のような議論が展開されました。

1. 「他者性」の概念は歴史的に変化しているのではないか。
2. 自分の中にある他者という問題をどう考えるか。
3. 障がい者芸術のクオリティー評価をどのように扱うべきか。
4. 障がい者芸術の他者性とクオリティーとの間に関係性はあるのか。
5. 芸術性、美、美的なものとはいったい何を指すのか。
6. 障がい者が自らグループを作り、文化を担っていくことは可能なのか。

プロジェクト3 芸術学と芸術療法の 共有基盤確立に向けた学際的研究 公開研究会

障がい者の他者性と芸術表現 —障がいの有無を超えた芸術表現とは何か—



日 時：2009年11月7日(土) 15:00~17:00
場 所：甲南大学18号館3階講演室
講 師：知足(知足院) 美加子
 (九州大学芸術工学研究院/彫刻)
企 画：西 欣也
 (甲南大学文学部/美学・芸術学)

来年度は、心理学、芸術学の双方からさらに芸術療法に関する議論を深めるべく、客員研究員の先生方をお招きした研究会を積極的に開催する予定です。本プロジェクトが学際的な意見交換の場となることを目指し、これからの活動を充実させていきますのでご期待ください。

*1 福子伝説とは、障がい児が生まれると家が栄えるという民間伝承のことです。これは、障がい児がいることで家族が力を合わせて仕事に励み、その結果、家が栄えることから言い伝えられるようになった伝承です。

*2 業病説とは、難病や治りにくい病気の原因を、「前世に悪業を行ったから」とする言い伝えを指します。

参考文献：知足美加子「障害者の他者性と芸術表現」、九州芸術学会『デアルテ』24号、2008年、p37~53。

プロジェクト1 加害—被害関係の多角的研究
〈和解と赦し〉

公開研究会

人間天皇の表象

—天皇制の危機と揺らぐジェンダー—



日 時：2009年12月18日(金) 16:30～18:30

場 所：甲南大学18号館3階講演室

報 告：北原 恵

(大阪大学／表象文化論、美術史、ジェンダー論)

企 画：港道 隆 (甲南大学／哲学)

なお、(2)東京裁判についての公開研究会は、先日(2010年1月22日)、野上元筑波大学准教授をお招きして開催しました。「東京裁判研究と東京裁判論のあいだ——歴史社会学と歴史学の近さと遠さに苦慮しながら」と題して行われた野上氏の講演についての詳細は、近日中に当研究所のウェブサイト(<http://kihs-konan-univ.org/>)に掲載する予定です。是非ともご覧いただき、第49回公開研究会とともに、ご意見・ご批判をいただけましたら幸いです。来年度につづく「和解と赦し」の研究に、積極的に活かしていきたいと思っております。

*論考のURL

http://kihs-konan-univ.org/contents_list2.asp?Fld=1&SId=60

本研究会は、プロジェクト1.加害—被害関係の多角的研究のうち「和解と赦し」をテーマとしています。前年度は、数度の班会議を開き、「和解」とは何か、「赦し」とは何かを中心に議論してきました。今年度前半は、その成果をもとに企画者である港道隆が「和解から赦しへ」*と題する論考を上梓し、論点整理を行いました。

二年目となる今年度後半は、以上の成果をふまえ、以下の観点から研究会を開催することとなりました。

具体的には、主に「和解」という一定の政治的概念を含む論点を主眼に、日本の戦後について大きな位置を占めるであろう(1)天皇制と(2)東京裁判についての公開研究会を開催することです。

今回は、(1)天皇制について、天皇(と天皇一家)のビジュアルがいかなる役割を果たしたかを表象の政治学として読み解くことを目的として、北原恵大阪大学教授を招聘して研究会を開催しました。北原氏は、「1945年のアジア・太平洋戦争の敗戦から占領期の天皇一家の表象」(北原報告より)の検討を通じて、天皇制の存続と地位をめぐる政治的課題を背景に、ジェンダーという分析手法をもちいて、以下の4つの天皇イメージについての検証を行いました。

1. マッカーサー／天皇会見写真(1945年)
2. 新天皇服
3. 「人間天皇」の写真(1946年元旦)
4. 『ライフ』にみる天皇一家の写真(1946年)

さまざまな天皇イメージを通して北原氏が明らかにした内容を概略的に示すと次のようになります。

第一に、天皇の戦争責任を不問にするための視角操作がいかに巧妙に行われていたかについて論じられました。

第二に、ジェンダーの視点を導入し、従来いわれていた「天皇の女性化」という「言説」について検討されました。その結果、天皇に完全なる「女性」ジェンダーを付さないための様々な仕掛けがなされていたことが、さまざまな写真を提示することで指摘されました。

第三に、天皇制護持のために軍人天皇から人間天皇へ「再編成」される過程について、論じられました。天皇(と天皇一家)の写真を編年的に読み解くことで、社会全体の変化(敗戦と復興)に敏感に反応しながら天皇の身体が可視的に表象されてきたことを明らかにされました。

講演をうけての質疑のセッションでは、天皇の表象が日本に与えた影響だけでなく、海外(とりわけかつての日本の植民地)でのそれについて、天皇一家の表象と日本のイエ制度の解体と近代家族論との関係、戦後、天皇一家の表象が日本社会に受け入れられる政治的・社会的・経済的背景との関連についてなどを中心に議論がなされました。

質疑を終えたのち、北原氏は付言として、言説としての「戦争画」について紹介されました。すなわち、「戦争画」のジャンルに組み入れられていない3点の絵画をスライドで提示し、「表象の戦争」が現在も続いていることを述べられました。

以上をもって、第49回公開研究会は閉会となりました。

● これまでの活動

公開研究会

プロジェクト3. 芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究

第47回 公開研究会

「障がい者の他者性と芸術表現

—障がいの有無を超えた芸術表現とは何か—

開催日: 2009年11月7日(土)

場所: 甲南大学18号館3階講演室

講師: 知足(知足院)美加子
(九州大学芸術工学大学院/彫刻)

企画: 西 欣也(甲南大学/美学・芸術学)

プロジェクト1. 加害-被害関係の多角的研究

第49回 公開研究会

和解と赦し

「人間天皇の象徴

—天皇制の危機とゆらぐジェンダー—

開催日: 2009年12月18日(金)

場所: 甲南大学18号館3階講演室

講師: 北原 恵
(大阪大学/表象文化論、美術史、ジェンダー論)

企画: 港道 隆(甲南大学/哲学)

プロジェクト1. 加害-被害関係の多角的研究

第50回 公開研究会

和解と赦し

「東京裁判研究と東京裁判論のあいだ

—歴史社会学と歴史学の近さと遠さに苦慮しながら—

開催日: 2009年1月22日(金)

場所: 甲南大学18号館3階講演室

講師: 野上 元(筑波大学/歴史社会学)

企画: 港道 隆(甲南大学/哲学)

研修会

第3回 思春期発達支援研修会・第48回プロジェクト2公開研究会

「共に考える子育て・親育ち

—発達障がい児を持つ保護者の“親育ち”を援助するには—

開催日: 2009年11月12日(木) 16:30~19:00

場所: 甲南大学18号館3階講演室

講師: 高山 恵子(NPO法人えいそんくらぶ代表/臨床心理士)

企画: 高石 恭子(甲南大学/臨床心理学、学生相談)

南野 美穂

(甲南大学人間科学研究所リサーチ・アシスタント)

司 会: 南野 美穂

● これからの活動

公開研究会

プロジェクト2. 育てる関係の危機と子育て意識の多相性についての研究

第51回 公開研究会

「先天性聴覚障害の子どもを持つ親の支援を考える」

開催日: 2010年2月22日(月) 16:30~18:30

場所: 甲南大学18号館3階講演室

講師: 河崎 佳子(京都女子大学/臨床心理学)

企画: 高石 恭子(甲南大学/臨床心理学・学生相談)

※参加には事前申込が必要です。

詳細は、当研究所ウェブサイトにてご確認ください。

研修会

第7回 KIHS 心理臨床ワークショップ

「K式発達検査を臨床に活かす」

開催日: 2010年2月21日(日) 10:00~17:00

場所: 甲南大学18号館3階講演室

講師: 大島 剛(神戸親和女子大学/臨床心理学)

企画: 森 茂起(甲南大学・人間科学研究所/臨床心理学)

共催: 甲南大学心理臨床カウンセリングルーム

後援: 兵庫県臨床心理士会

対象: 臨床心理士もしくは心理臨床業務に携わる方

※参加には事前申込が必要です。

詳細は、兵庫県臨床心理士会HPもしくは当研究所ウェブサイトにてご確認ください。

第1回 KIHS アートセラピーワークショップ

開催日: 2010年3月6日(土) 13:00~15:00

場所: 甲南大学18号館3階講演室

講師: 今井 真理(四天王寺大学/芸術療法)

企画: 内藤あかね

(甲南大学心理臨床カウンセリングルーム/臨床心理学)

※参加には事前申込が必要です。

詳細が決まり次第、随時当研究所ウェブサイトなどでお知らせします。

発行年月日: 2010年2月10日



編集後記

KIHS研究事業・第3期のうち2年目が終わろうとしています。

今年度は9月にシンポジウム「戦争体験の記憶と語り」を開催しました。

4つのプロジェクトでは、公開研究会・研修会や会議を設けながら、テーマごとに、あるいはテーマ横断的に研究を進めるために、精力的に活動を進めております。

目に見えやすい結果が出づら研究テーマではありますが、数年後あるいは数十年後の未来を見据えながら研鑽を積んでいきたいと考えていますので、当研究所の今後をご期待ください。